

## 新会長のことば

大 滝 末 男

去る8月9日、大阪市立自然史博物館で第2回全国集会在が開かれた。席上、水草同好会は水草研究会に改称され、初代会長に私が推挙されたので、ひとことご挨拶申します。

本会は、現在会員約130名で、職業別にみると、小学校から大学までの教育公務員のほか、区役所その他各種の官公吏、一般会社および主婦の方も含まれている。したがって人によって入会した動機はいろいろであろうと思います。しかし、会員の共通点は水草(みずくさ)に関心が深く、興味を持っていることであることだけははっきりと断言できるでしょう。

私の場合は少年のころ、札幌の郊外で生家の裏にある菖(やち、野地)で、ミズバショウの花に魅せられたのがそもその始まりで、高校教師になってからは、生物部の諸君と野外観察で、アサザ、ヒシモドキ、オニバスなどの花を初めて見たのが、興味と研究意欲をもつようになった動機であったと思っています。

当初は水草を求めて自転車、次いで単車にのって近隣の池沼めぐり、車の免許をとってマイカーを利用するようになってからは関東一円から日本全国へと北は北海道、南は九州の先端まで足をのばすようになった。かれこれ30年になるが、いまでは水草の分布の面で、どこの湖沼へ行けばどんな水草が見られるか、概略わかるようになった。水草の探索旅行は、おもに夏休みでレジャーを兼ねたものであるが、いざフィールドに出てみると形態学的事実だけでなく、分類・生理・生殖・発生・生態その他の分野で、未知の問題が山積していることに驚かさ

れる。たとえば、分類的に頭のいたいのはヒシ科やヒルムシロ科である。また、生理的には開花期、開花时间、開花条件などの諸問題、少し首をつっこむと未解決なことが軒並みなのである。

ところで、本年7月、植物画家の石戸忠氏ほか多数の協力者によって、『日本水生植物図鑑』を北隆館から出版することができた。しかし、初版は不完全でミスも多く、私の研究不足をさらけ出し、一人の人間の力はいかに微弱であるかを痛感し、甚だ赤面至極をしている昨今である。

還暦を過ぎた私には、いままでのように高速道路を時速100km以上でドライブすることは体力的に考えものであり、また、能力的にもそろそろ限界に近づいたようである。しかし、幸いなことには、本会には新進気鋭の学徒を含む若い会員が多いので、非常に力強く将来が楽しみである。このたび、会長をお引き受けはしたものの、私はたんに会を運営する世話役のつもりであり、決して指導的存在であるとは考えていません。本会は学会的な要素を含めなくてはならないが、同好会的要素も強調したいものと考えています。

こよなく自然を愛し、水草を通じて趣味をのばし、レジャーを楽しみ、会員相互の親睦を大いに増進させたい。老若男女、どなたでも自由に参加できる楽しい研究会に発展させたいと念願しています。どうぞ皆さん、短編的なニュースでも、どしどし会報に発表して下さい。皆さんのご鞭達とご支援をお願いすると同時に、会員各位のご健康とご発展を心からお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

(昭和55年9月20日記)